

序説 黄帝医籍

『黄帝医籍研究』要旨

真柳 誠

黄帝医籍とは書名に「黄帝」を冠する中国医学古典籍で、漢代の『素問』『九巻（針經・靈枢）』『難經』と、初唐までに編纂された『明堂』『甲乙經』『太素』を総称するわたしの造語である。拙著全六章では、これら六文献ごとの成書と伝承を考究した。第六章三節以下では、紀元前における孔穴・經脈の認知から唐代までの変遷を、出土文物と黄帝医籍より総合的に議論した。

わたしは拙著を一〇ページほどながめると辟易しい環境だと寝てしまう。他人ならなおさらだろう。これは予測できたので、『難經』以外の章末に総括や結語を整理した。しかし今それらをながめても、やはり眠くなる。そこで六千字くらいの要旨なら通覧できるだろうと思いつき、なんとか圧縮してみた。ご一読いただければさいわいである。

第一章 『素問』

本書は前漢までの文献群にもとづき一世紀初に編纂され、『傷寒論』序（三世紀初）に「素問」と記録された。のち全元起注本（約五〇〇）と王冰次注本（七六二）をへたが、ともに現存しない。全元起本が隋・唐で「黄帝素問」と著録され、書名に黄帝を冠したのは、医官育

成の教材として黄老思想で権威性を付与された可能性がある。王冰本も黄帝を冠していた。王冰序は『甲乙經』序（四世紀後半）の表現を一部改変し、『素問』九巻と『靈樞』九巻が『漢書』芸文志の「黄帝内經」一八巻であるといい、のち定説とされる。

北宋では王冰注本に新校正注を付加した熙寧本（一四一三）が従来から知られ、書題は「補註黄帝内經素問」だった。あらたに存在を論証した北宋版には、孫兆による元豊校刊本（一〇七八～八五）、蔡京らによる宣和校刊本（一一二一）がある。南宋の紹興本（一一五五）では、王繼先らが「〔重広補註〕黄帝内經素問」の書題で『黄帝内經靈樞』二四巻と合刻し、王冰説の「黄帝内經」を実体化していた。紹定本（一二二八～三三）も同書題を踏襲した。南宋の中後期刊本と未詳年刊本の存在も推定されたが、これら宋版はみな亡佚している。

で、紹興本の影刻が明の顧従徳本（一五五〇）である。元豊本系が元版の読書堂本（一一八三）と古林書堂本（一三三九）、宣和本系が日本の室町古鈔本、元豊・宣和・紹興本系の混合本が金版である。熙寧本の旧を保持する顧従徳本には初刻本と補刻本があり、不詳とされてきた明の仿宋版二種は、顧本初刻版と明・無名氏の顧本海賊版だった。顧従徳本と読書堂本・室町古鈔本の校異から、熙寧本・元豊本・宣和本における校刊の実態も知られた。今後の研究には顧本・読書本・古鈔本の校勘が必須である。

第二章 『針經』と『靈樞』

二世紀前後に編纂された本書は、『傷寒論』序に「九巻」、『甲乙經』序に「針經九巻」と記録された。

唐の針生教材で「黄帝針經」が正称となつたのは、『素問』と同じ背景からだろう。新羅と日本でも医官育成現存本の来歴も解明できた。熙寧本の覆刻が紹興本

の教材とされた。北宋では零本となっていたが、高麗の献本中に完本の『黄帝針經』九巻があり、旧法派の王欽臣が元祐本を刊行（一〇九三）した。翌年から新法派政権が北宋末まで続き、旧法派による元祐本は重印されなかつただろう。かわりに元祐本も使用し、唐代からの伝本をよそおう偽經『靈枢經』九巻が作成（一一一六～一八）され、のち亡佚した。金軍による靖康の変で版本まで掠奪されたため、元祐本は現存しない。元祐本の旧貌も從来未詳だつたが、金・蒙古・元の文献に見いだされた『黄帝針經』の佚文は、現『靈枢』と篇名・篇順までほぼ対応していた。

南宋では秘書省になかつた元祐本を史崧が献上したが、当時は金との紹興和議への不満から「華夷思想」が隱然としてあつた。そこで王繼先は元祐本序など「東夷」献本や旧法派の証拠を削除し、書名・巻数も『黄帝内經靈枢』二四巻に改めた。さらに『〔重広補註〕黄帝内經素問』二四巻と合刻（一一五五）し、王冰の「黄帝

内經伝説」を実体化した。しかも王繼先の失脚と追放（一一六一）により、後の重印本は繼先の序跋などを削除し、宋の史書も目録書も紹興本を黙殺したため、当經緯が歴史の闇に埋もれていたのである。

紹興本『靈枢』（亡）には元の翻刻本（亡）があり、それを再翻刻した元・古林本と明・無名氏本が現『靈枢』の祖本だつた。このように現『靈枢』は北宋の大規模な校定をへなかつたため、唐代に遡る旧態が遺存するとみられる。

第三章 『難經』概説

本書は二世紀中後期の成書で、『素問』『九巻』を進展させた針法を八一章で論じる。『傷寒論』序に「八十難」と記録され、西晋の皇甫謐は「難經」ともいう。一二三九年ころには呂広注本が出現した。現行本では宋代までの旧注を集成した『難經集注』古鈔本が善本だが、

中国では元・滑寿『難經本義』の流行により、かつて『難經集注』が亡佚していた。

近年、ロシア東洋学研究所支部の敦煌文献から四〇五世紀の筆写らしい『難經』断簡が発見され、現行本と異なる章順で記述されていた。現行本は、楊玄操が從來の順次を「類例相從」で改編（六二一～六三〇）した書に由来するため、玄操以前の旧態の一部が敦煌本で知られたのである。

卷』『明堂』の引用文を「事類相從」で編纂・加注していた。『素問』『九卷』の引用文頭を「黃帝問曰」と定型化し、『脈經』と同じ一〇卷本ゆえ十干で「黃帝甲乙經」と題したのだろう。

第四章 『甲乙經』

本書は西晋・皇甫謐の撰とするのが定説だったが、四世紀後半の無名氏撰と論証できた。その序に「素問九卷」と「針經九卷」が『漢志』の「黃帝內經十八卷」とい、当伝説の端緒となる。孔穴主治文の「……主之」形式は仲景医書（三世紀初）から借用し、『脈經』（三世紀前中期）の「類例相從」に倣い、『素問』『九

梁『七錄』（五二三）以前に孔穴図二卷が付録されて一二巻本となり、隋ではおそらく医官育成教材との関連で図二巻が削除され、音釈一巻が付録された。皇甫謐撰に託されたのは七世紀前後で、同時に卷八～一〇が卷八～一二に分巻されて再度一二巻本となり、現行本まで踏襲される。唐では医生教材として校定され、その系統が敦煌本断簡のP.3481とS.10527らしい。

宋版はかつて熙寧校刊の大字本（一〇六九）がしられていた。あらたに元祐再校刊小字本（一〇八八）と政和再々校刊大字本（一一〇三～一四）の存在を論証できたが、みな亡佚している。現存本は『古今医統正脈全書』（一六〇二）本が元祐本系、明藍格抄本が政和本系だった。医統本は經文・無名氏原注・唐注・北宋熙寧注・

北宋元祐注から構成され、明抄本はさらに北宋政和注と南宋・元・明の注などが付加されている。これら系統と条文構造を解明したので、今後は正確な研究と利用ができるようになった。

第五章 『太素』

『黄帝内經太素』は楊上善が『素問』『九卷』を類編して撰注したが、上善と成書・日本伝来の年代には定説がなかった。近年みいだされた墓誌より、上善（五八九～六八一）は約六七五年に本書三〇卷と『黄帝内經明堂』一三卷（上善『明堂』）を高宗に奏上したことがしられた。両書が書名に「黄帝内經」を冠した嚆矢である。上善は太子の李賢に侍し、高宗侍医の孫思邈と面識があつただろう。六八四年に武則天が李賢を自死させたのち、奏上本も太子の司經局にあつた稿本も秘匿された。

唐に留学した阿倍仲麻呂は司經局校書を初任官（七二

一～二七）し、当時は李賢の名誉が回復されている。帰国を不許とされた仲麻呂は入手した李賢関係書も吉備真備に託し、七三五年の真備帰朝で『太素』ほかが日本に将来された。中国では北宋末の金軍侵略で『太素』が亡佚した。

日本では七五七年の孝謙天皇勅で本書が医生教材とされる。平安時代に流布し、一四世紀から次第に消滅するが、仁和寺は本書ほかの医書を一六世紀末に収蔵していた。仁和寺の古医書を小島尚質らが一八三一～四年にかけて影鈔し、いざれも唐代の旧を保持するため幕末に多数重鈔され、『素問』『靈枢』などの研究に利用されている。

明治になると、清国公使館隨員の楊守敬が一八八一年に小島家蔵書を一括入手し、八四年に帰郷した。これらに基づく『太素』の中国初版は袁昶本（一八九七）だが、釈文等の問題が多い。ついで釈文・校刊したのが

で刊行（一九三五）した。劉貢三本を入手した矢数有道は『太素』の研究を一九四三年に報告し、同年に軍医

を志願して武漢へ赴任、四六年に武漢近郊で客死した。

武漢で劉貢三らと面談する希望があつたらしい。仁和寺本原本は日本で影印（一九八一）され、中・日での釈文研究が錢超塵らの新校正本（一〇〇六）と左合昌美の新校正本（一〇〇九）に結実した。『素問』『靈樞』等の研究に『太素』を正確に利用する基盤が、ようやく両国で構築されたのである。

（甲乙『明堂』）し、のち異本等の派生もあつて本書との条文が次第に湮滅したらしい。

初唐では甄權が『明堂圖』を編纂（約六一〇）した。

これを李襲譽らが六三〇年に増修した『明堂人形圖』一巻は、孔穴部位や主治文が甲乙『明堂』とやや相違する。楊玄操は約六二一～三〇年に『明堂音義』二巻を撰述し、甲乙『明堂』と大差ない經文も併記していた。両『唐志』だけに著録の『黃帝明堂經』三巻は、「黃帝」と「經」が付加されるので、針生教材として永徽医疾令（六五一）前に『明堂人形圖』と旧伝『明堂』文献より編纂されただろう。以上の初唐文献は佚文のみ残存する。

第六章 ①『明堂』

本書と付録の部位別孔穴『流注圖』は、三世紀中期の成書と論証できた。条文形式を一世紀初の『神農本草經』から借用し、『九卷』『難經』の語句も転載している。ロシア東洋学研究所支部の敦煌本断簡は四～五世紀の鈔写だろう。『甲乙經』がほぼ全文を分散して引用

孫思邈『千金方』（六五〇～五八）の卷二九・三〇（千金『明堂』）は、孔穴図を『明堂人形圖』、条文をおもに甲乙『明堂』に依拠した。上善『明堂』一三巻（約六七五）は巻一だけ現存し、孔穴部位などを甲乙『明堂』、主治文をおもに『黃帝明堂經』から引用した。

王燾『外台秘要方』（七五二）の卷三九（外台『明堂』）

は、孔穴部位などを甲乙『明堂』、主治文を甲乙・千金『明堂』と『明堂人形図』にもとづく。付説した日本丹波康頼『医心方』（九八四）の卷一（医心『明堂』）は、上善『明堂』が主底本だった。各々がいくつかの文献に依拠したのは、いずれの編纂時も原『明堂』系の伝本がなかつたためである。近年、甲乙『明堂』による小黄竜祥『黄帝明堂經輯校』、上善『明堂』による小曾戸丈夫ら『黄帝内經明堂』が公刊され、初唐からの原『明堂』探求によく終止符がうたれた。

第六章 ②針灸術の発生、孔穴・経脈の認知と変遷

青銅凹面鏡などと艾による日光からの採火が、中國戦国時代にはおこなわれていた。雲夢秦簡『封診式』（前二六二～前二一七）に記載の檢屍規定「久（灸）故癥」からすると、瘢痕となる打膿灸が戦国時代からあつ

た。灸瘡からの排膿に砭石をもちい、その出血から瀉血法も生まれただろう。瘢痕から灸刺部位も次第に認知されたが、まだ穴名も経脈概念もない。初期の石針法を記録した『史記』扁鵲伝の「外三陽五会」とは、外（頭上）三陽（五列）の五会（愈）計二五部位をいい、三才と陰陽五行で表現している。この灸刺列と部位別取穴を、のち『素問』は「五行・行五」と定型化した。敦煌本と甲乙『明堂』の孔穴配列によると、頭部から下行する中心線上および並行する背部と胸腹部の灸刺列が、最初に認知されただろう。これは体幹骨格が上下に連続する構造にもとづいており、経脈概念の第一段階だった。

やや遅れて認知されたのが四肢を上行する灸刺列で、背景には手足の怒張した血管と脈診があつただろう。三陰三陽説を併用し、手足から顔面や一部臓腑にいたる第二段階の一脈説を記録したのが、前三世紀末以前の『足臂十一脈灸經』である。手足経脈の取穴法を、

のち『靈枢』は「五五・二十五、六六・三十六」と定型化していた。頭部・体幹の灸刺列を手足の經脈と連続させたのが前一世紀の綿陽（男性？）人形、灸刺点もえがいたのが前二～前一世紀の成都（女性？）人形である。成都人形の背部には臓腑名が記入され、背部の灸刺点と臓腑の相関性が最初に認識されたことを示唆していた。同時に灸刺点への命名が徐々に始まり、部位と主治など初期の孔穴概念が形成されたのは約前一世紀で、その様相が『素問』にみえる。

紀元前後～一世紀には石針にかわり、孔穴への金属微針法が普及した。一世紀後半の經脈篇（『九巻』所収）

は『足臂』系の灸法を針法に発展させ、臓腑と全身を「脈気が大循環」する第三段階の一・二脈を提起。頭部・体幹の孔穴列を形式上は手足經脈に帰属させたが、各穴の属性などは簡単に改変できない。そこで三世紀中期の原『明堂』は、頭部・体幹を下行する孔穴列と手足を上行する臓腑一二脈の孔穴列を折衷し、命名され

た孔穴を術数論から三四九穴に整理した。

原『明堂』の折衷説は、四世紀後半の甲乙『明堂』から七世紀中期の千金『明堂』まで踏襲されたが、千金『明堂』には臓腑概念の浸透と經脈概念の進化がみえる。七世紀後半の上善『明堂』は、手足一二脈の孔穴配列を『九巻』經脈篇の循環説で並びかえ、頭部・体幹の孔穴も臓腑一二脈と任脈・督脈に分配した。これで全孔穴を一・四脈に所属する「經穴」としたことは、經脈説の出現と孔穴への命名につぐ進展、かつ現經絡・經穴説の予見ともいえる。八世紀中期の外台『明堂』は『九巻』五閱五使篇の順次で、手足一二脈に頭部・体幹と督脈・任脈の孔穴列を連続させていた。しかし甲乙『明堂』以来の孔穴順次にしたがつたため、同一脈内で反対方向の配列もある。一〇世紀末の医心『明堂』は臓腑經脈概念のすべてを否定し、孔穴を部位別で上→下方向に編成、四肢では一本の孔穴列がからみつくように

以上のように、頭部・体幹の孔穴列が次第に手足の臍腑経脈に連続され、上善『明堂』で現経穴・経絡説を予言していた。逆に、『素問』以前の孔穴書を再現しようとしたのが日本の医心『明堂』だった。これら文献のうち、「黄帝医籍」と『千金方』『千金翼方』『外台秘要方』が北宋で校刊され、以後の孔穴・経脈概念の発展におおきな影響をあたえたのである。

結語

「黄帝医籍」六文献の伝承と変化におよぼした歴代王朝の政策、さらに政変・戦乱の影響は甚大だった。孔穴・経脈の認知と変遷には、各文献と傑出した個人の見解が関与していたことも特筆しなければならない。